

◎指示があるまで開かないこと。

(平成 26 年 2 月 10 日 14 時 40 分 ~ 17 時 00 分)

注 意 事 項

1. 試験問題の数は 80 問で解答時間は正味 2 時間 20 分である。
2. 解答方法は次のとおりである。
 - (1) (例 1)、(例 2)の問題では a から e までの 5 つの選択肢があるので、そのうち質問に適した選択肢を(例 1)では 1 つ、(例 2)では 2 つ選び答案用紙に記入すること。なお、(例 1)の質問には 2 つ以上解答した場合は誤りとする。(例 2)の質問には 1 つ又は 3 つ以上解答した場合は誤りとする。

(例 1) 101 応招義務を規定して

いるのはどれか。

- a 刑 法
- b 医療法
- c 医師法
- d 健康保険法
- e 地域保健法

(例 2) 102 医師法で医師の義務とされて

いるのはどれか。2 つ選べ。

- a 守秘義務
- b 応招義務
- c 診療情報の提供
- d 医業従事地の届出
- e 医療提供時の適切な説明

(例 1)の正解は「c」であるから答案用紙の **c** をマークすればよい。

答案用紙①の場合、

101	a	b	c	d	e
			↓		
101	a	b		d	e

答案用紙②の場合、

101	a	101	a
	b		b
	c	→	
	d		d
	e		e

(例 2)の正解は「b」と「d」であるから答案用紙の **b** と **d** をマークすればよい。

答案用紙①の場合、

102	a	b	c	d	e
			↓		
102	a		c		e

答案用紙②の場合、

102	a	102	a
	b		
	c	→	c
	d		
	e		e

(2) (例3)では質問に適した選択肢を3つ選び答案用紙に記入すること。なお、(例3)の質問には2つ以下又は4つ以上解答した場合は誤りとする。

(例3) 103 医師法に規定されているのはどれか。3つ選べ。

- a 医師の行政処分
- b 広告可能な診療科
- c 不正受験者の措置
- d へき地で勤務する義務
- e 臨床研修を受ける義務

(例3)の正解は「a」と「c」と「e」であるから答案用紙の **a** と **c** と **e** をマークすればよい。

答案用紙①の場合、

103	<input type="radio"/> a	<input type="radio"/> b	<input type="radio"/> c	<input type="radio"/> d	<input type="radio"/> e
103	<input type="radio"/>	<input type="radio"/> b	<input type="radio"/>	<input type="radio"/> d	<input type="radio"/>

↓

答案用紙②の場合、

103	<input type="radio"/> a	<input type="radio"/>
	<input type="radio"/> b	<input type="radio"/> b
	<input type="radio"/> c	<input type="radio"/>
	<input type="radio"/> d	<input type="radio"/> d
	<input type="radio"/> e	<input type="radio"/>

→

(3) 選択肢が6つ以上ある問題については質問に適した選択肢を1つ選び答案用紙に記入すること。なお、(例4)の質問には2つ以上解答した場合は誤りとする。

(例4) 104 平成22年医師・歯科医師・薬剤師調査で人口10万人当たりの医師数が最も少ないのはどれか。

- a 北海道
- b 青森県
- c 茨城県
- d 埼玉県
- e 京都府
- f 和歌山県
- g 鳥取県
- h 徳島県
- i 佐賀県
- j 沖縄県

(例4)の正解は「d」であるから答案用紙の **(d)** をマークすればよい。

答案用紙①の場合

104	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(f)	(g)	(h)	(i)	(j)
104	(a)	(b)	(c)	●	(e)	(f)	(g)	(h)	(i)	(j)

↓

答案用紙②の場合

104	104
(a)	(a)
(b)	(b)
(c)	(c)
(d)	●
(e)	(e)
(f)	(f)
(g)	(g)
(h)	(h)
(i)	(i)
(j)	(j)

→

- 1 産褥熱の感染巣として最も多い部位はどれか。
- a 外 陰
 - b 膣
 - c 子宮頸管
 - d 子宮内膜
 - e 卵 管
- 2 むずむず脚症候群について正しいのはどれか。
- a レム(REM)睡眠と関係が深い。
 - b ドパミン遮断薬が有効である。
 - c 加齢とともに患者数は減少する。
 - d 脚の異常感覚は運動によって改善しない。
 - e 足関節などの不随意運動が入眠後にみられる。
- 3 左眼の視野(別冊 No. 1 ①~⑤)を別に示す。
原発開放隅角緑内障でみられるのはどれか。
- a ①
 - b ②
 - c ③
 - d ④
 - e ⑤

別 冊 No. 1 ①~⑤

4 加齢黄斑変性の検査に用いられるのはどれか。

- a Schirmer 試験
- b アノマロスコープ
- c 光干渉断層計(OCT)
- d フレアセルフオートメーター
- e スペキュラーマイクロスコープ

5 嗄声を訴える 60 歳女性の安静呼吸時と発声時の喉頭内視鏡像(別冊 No. 2A、B)を別に示す。

考えられるのはどれか。

- a 右声帯癌
- b 右声帯結節
- c 右声帯ポリープ
- d 左声帯麻痺
- e 左ポリープ様声帯

別 冊

No. 2 A、B

6 急性好酸球性肺炎について正しいのはどれか。

- a 喫煙と関連しない。
- b 呼吸不全を伴わない。
- c 副腎皮質ステロイドが奏効する。
- d アレルギー性疾患を背景に発症する。
- e 気管支肺胞洗浄液で好酸球比率は正常である。

7 68歳の男性。心房細動、うっ血性心不全、脳梗塞および脂質異常症のため、アンジオテンシン変換酵素(ACE)阻害薬、利尿薬、ワルファリン及びHMG-CoA還元酵素阻害薬を内服している。

この患者の心不全のコントロールの指標として**有用でない**のはどれか。

- a SpO₂
- b 体重
- c LDL コレステロール
- d 胸部エックス線写真の心胸郭比
- e 脳性ナトリウム利尿ペプチド(BNP)

8 Fallot 四徴症の低酸素発作時の治療薬として適切なのはどれか。

- a モルヒネ
- b フロセミド
- c ニトログリセリン
- d イソプロテレノール
- e 副腎皮質ステロイド

9 早期胃癌の定義はどれか。

- a 陥凹がない。
- b リンパ節転移がない。
- c 長径が1 cm 未満である。
- d 隆起の高さが5 mm 未満である。
- e 深達度が粘膜下層までにとどまる。

10 慢性炎症性疾患に伴う貧血で誤っているのはどれか。

- a Fe 値低下
- b 赤血球寿命短縮
- c フェリチン値低下
- d ヘプシジン産生亢進
- e 総鉄結合能(TIBC)低下

11 子宮体癌のリスクファクターでないのはどれか。

- a 肥 満
- b 大腸癌の家族歴
- c 黄体ホルモンの内服
- d 多嚢胞性卵巣症候群
- e タモキシフェンの内服

12 Cushing 症候群で見られるのはどれか。

- a 乏 尿
- b 抑うつ
- c るいそう
- d 白血球減少
- e 低カルシウム尿症

- 13 思春期から若年成人に好発するのはどれか。
- a 顕微鏡的多発血管炎
 - b 高安動脈炎〈大動脈炎症候群〉
 - c 巨細胞性動脈炎〈側頭動脈炎〉
 - d アレルギー性肉芽腫性血管炎〈Churg-Strauss 症候群〉
 - e Schönlein-Henoch 紫斑病〈アナフィラクトイド紫斑病〉
- 14 ロタウイルス感染症で正しいのはどれか。
- a 発熱は伴わない。
 - b 多くは血便を伴う。
 - c 初冬から早春に多い。
 - d 有効な予防接種はない。
 - e 好発年齢は 10 歳ころである。
- 15 感染症と原因菌の組合せで誤っているのはどれか。
- a Waterhouse-Friderichsen 症候群 ————— *Neisseria meningitidis*
 - b 偽膜性腸炎 ————— *Clostridium difficile*
 - c 細菌性赤痢 ————— *Salmonella* spp. 〈サルモネラ属菌〉
 - d 院内肺炎 ————— *Pseudomonas aeruginosa*
 - e 食中毒 ————— *Vibrio parahaemolyticus*

16 ボツリヌス中毒で認められないのはどれか。

- a 縮 瞳
- b 眼瞼下垂
- c 輻湊障害
- d 対光反射消失
- e 眼球頭反射消失

17 受動喫煙によって発症リスクが増加する小児の疾患はどれか。

- a 水頭症
- b 髄膜腫
- c 虫垂炎
- d 内耳炎
- e 乳幼児突然死症候群

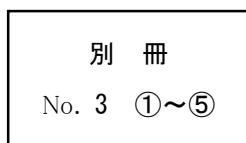
18 騒音性難聴の特徴はどれか。

- a 混合性難聴である。
- b 補充現象は陰性である。
- c 短時間曝露では発生しない。
- d 曝露を中止すると回復する。
- e 高周波数騒音で発生しやすい。

19 皮膚生検組織の蛍光抗体直接法の写真(別冊 No. 3 ①～⑤)を別に示す。

水疱性類天疱瘡の所見はどれか。

- a ①
- b ②
- c ③
- d ④
- e ⑤



20 72歳の男性。今朝、起床時から全身倦怠感が出現しているため来院した。心電図(別冊 No. 4)を別に示す。

認められる所見はどれか。

- a 洞停止
- b 心房粗動
- c I度房室ブロック
- d II度房室ブロック
- e 心室固有調律



21 僧帽弁閉鎖不全症の直接の原因とならないのはどれか。

- a 乳頭筋断裂
- b リウマチ熱
- c 僧帽弁逸脱
- d 感染性心内膜炎
- e 急性大動脈解離

22 潰瘍性大腸炎患者の直腸粘膜生検組織の H-E 染色標本(別冊 No. 5)を別に示す。

矢印で示す所見はどれか。

- a 陰窩膿瘍
- b 粘膜の萎縮
- c 杯細胞の減少
- d 腺の配列異常
- e 粘膜のびらん

別 冊

No. 5

23 イレウスで緊急手術の必要性を最も示唆するのはどれか。

- a 間欠的な腹痛
- b 腹壁が板状硬
- c 金属性腸雑音の聴取
- d 胆汁の混ざった吐物
- e 腹部エックス線写真で複数の小腸ループ像

24 急速進行性糸球体腎炎を呈した患者の腎生検のPAS染色標本(別冊 No. 6A)と蛍光抗体 IgG 染色標本(別冊 No. 6B)とを別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a ANCA 関連血管炎
- b IgG4 関連疾患
- c 急性間質性腎炎
- d 血栓性血小板減少性紫斑病
- e 全身性エリテマトーデス(SLE)

別 冊

No. 6 A、B

25 頭部単純CT(別冊 No. 7A ①~⑤)と意識障害患者の眼位(別冊 No. 7B)とを別に示す。

この患者の眼位と合致する CT はどれか。

- a ①
- b ②
- c ③
- d ④
- e ⑤

別 冊 No. 7 A ①~⑤、B

26 疼痛誘発手技(別冊 No. 8)を別に示す。

診断する病変部位はどれか。

- a 腰 椎
- b 股関節
- c 膝関節
- d 足関節
- e 恥骨結合

別 冊 No. 8

- 27 後天性免疫不全症候群(AIDS)の併発疾患でないのはどれか。
- a サイトメガロウイルス感染症
 - b ニューモシスチス肺炎
 - c 口腔内カンジダ症
 - d 悪性リンパ腫
 - e プリオン病
- 28 男性の尿路クラミジア感染の検査として最も適切なのはどれか。
- a 尿沈渣
 - b 精液検査
 - c 尿のPCR法
 - d 血液培養検査
 - e 尿のGram染色
- 29 禁煙外来における初診時の対応として適切でないのはどれか。
- a 禁煙の意思を確認する。
 - b 身体症状の有無を聴取する。
 - c 現在までの喫煙歴を聴取する。
 - d 目標とする喫煙本数を話し合う。
 - e 問診票によりニコチン依存の程度を診断する。

30 双極性障害(躁うつ病)の維持療法の治療薬として適切なのはどれか。2つ選べ。

- a バルプロ酸
- b 炭酸リチウム
- c ハロペリドール
- d フェノバルビタール
- e メチルフェニデート

31 急性胆管炎の原因菌として頻度が高いのはどれか。2つ選べ。

- a *Clostridium difficile*
- b *Escherichia coli*
- c *Haemophilus influenzae*
- d *Helicobacter pylori*
- e *Klebsiella* spp. (クレブシエラ属菌)

32 原発性骨髄線維症の確定診断に有用なのはどれか。2つ選べ。

- a 白赤芽球症
- b 標的赤血球
- c 血清LD上昇
- d JAK2遺伝子変異
- e 骨髄組織の鍍銀染色陽性

33 妊娠性絨毛癌に用いる薬剤はどれか。2つ選べ。

- a メトトレキサート
- b マイトマイシンC
- c アドリアマイシン
- d アクチノマイシンD
- e 酢酸メドロキシプロゲステロン

34 脱落膜の欠損をきたす可能性がある手術はどれか。2つ選べ。

- a 帝王切開術
- b 卵管結紮術
- c 子宮頸管縫縮術
- d 子宮内容除去術
- e 卵巣嚢腫摘出術

35 肺動脈絞扼術が適応となる疾患はどれか。2つ選べ。

- a Fallot 四徴症
- b 動脈管開存症
- c 心房中隔欠損症
- d 完全大血管転位症
- e 心内膜床欠損症(房室中隔欠損)

36 骨盤部 MRI の T2 強調矢状断像 (別冊 No. 9) を別に示す。

この疾患で見られる症状はどれか。2 つ選べ。

- a 排尿痛
- b 月経痛
- c 過多月経
- d 外陰部痛
- e 帯下の増加

別 冊

No. 9

37 褐色細胞腫の血圧管理に用いるのはどれか。2 つ選べ。

- a α 遮断薬
- b ループ利尿薬
- c カルシウム拮抗薬
- d スピロノラクトン
- e サイアザイド系利尿薬

38 耳下腺腫瘍摘出術を行う際、手術前に説明すべき合併症はどれか。3 つ選べ。

- a 血 腫
- b 髄液漏
- c 異常発汗
- d テタニー
- e 顔面神経麻痺

39 Ramsay Hunt 症候群の急性期の症候はどれか。3つ選べ。

- a 複視
- b 難聴
- c めまい
- d 耳介疱疹
- e 眼瞼下垂

40 妊娠初期の妻の風疹 HI 抗体が陰性と判明した。

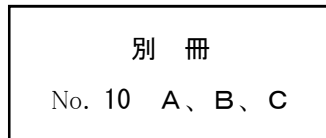
この夫婦への適切なワクチン接種時期の組合せはどれか。

	妊 婦	夫
a	ただちに	ただちに
b	ただちに	妊娠全期間
c	妊娠全期間	ただちに
d	妊娠全期間	妊娠全期間
e	産褥期	ただちに
f	産褥期	妊娠全期間

41 58歳の女性。呼吸困難を主訴に来院した。2年前に乳癌で左乳房切除術を受けている。呼吸困難は3週間前から徐々に進行してきている。収縮期の心エコー図(別冊 No. 10A、B、C)を別に示す。

この患者に認められる可能性が**低い**のはどれか。

- a 奇脈
- b 頻脈
- c 肝腫大
- d 高血圧
- e 頸静脈怒張



42 13歳の女子。低身長と無月経とを主訴に来院した。周産期に異常はなかった。生来小柄であり、低身長に気付いていたが、精査を受けたことはなかった。初経は発来していない。身長 130 cm(-3.5 SD)、体重 23 kg(-3.0 SD)。体温 36.2℃。脈拍 80/分、整。血圧 104/66 mmHg。呼吸数 12/分。SpO₂ 98 % (room air)。胸骨右縁第2肋間を最強点とするⅢ/Ⅵの収縮期雑音を認める。呼吸音に異常を認めない。外反肘を認める。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。皮膚に皮疹を認めない。陰毛を認めない。乳房は発達していない。尿所見と血液生化学所見とに異常を認めない。胸部エックス線写真に異常を認めない。

この患者の診断や病態に対する検査で**重要でない**のはどれか。

- a 染色体分析
- b 心エコー検査
- c 血中 FSH 測定
- d スパイロメトリー
- e 手エックス線撮影

43 65歳の男性。1か月前からの右手背の潰瘍を伴う結節を主訴に来院した。自宅で熱帯魚を飼育している。右手背に、中央に潰瘍を伴う直径1cmの結節を認める。表在リンパ節は触知しない。発熱はない。胸部CTで肺野に異常を認めない。潰瘍の滲出液のPCR検査で結核菌は陰性。Sabouraud寒天培地での培養検査は陰性。滲出液のZiehl-Neelsen染色標本(別冊No. 11)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 皮膚腺病
- b 尋常性狼瘡
- c アスペルギルス症
- d スポロトリコーシス
- e 非結核性(非定型)抗酸菌症

別 冊 No. 11

44 52歳の男性。持続する喘鳴、手足のしびれ感および発熱を主訴に来院した。2年前から喘鳴が出現し、気管支喘息と診断され自宅近くの診療所で治療を継続している。3か月前から四肢のしびれ感が出現した。四肢のしびれ感が増強するとともに2週間前から発熱を繰り返すようになったため紹介入院となった。喫煙歴はない。ペットは飼育していない。粉塵吸入歴はない。体温 38.6℃。脈拍 112/分、整。血圧 140/90 mmHg。呼吸数 24/分。四肢末梢に軽度の表在・深部感覚の低下を認める。尿所見：蛋白(－)、糖(－)、ケトン体(－)、潜血(－)、沈渣に白血球を認めない。血液所見：赤血球 488 万、Hb 14.1 g/dl、Ht 42 %、白血球 17,600 (桿状核好中球 2 %、分葉核好中球 53 %、好酸球 30 %、好塩基球 1 %、単球 1 %、リンパ球 13 %)、血小板 28 万。血液生化学所見：総蛋白 6.7 g/dl、アルブミン 3.9 g/dl、クレアチニン 0.7 mg/dl、Na 139 mEq/l、K 4.2 mEq/l、Cl 101 mEq/l。免疫血清学所見：CRP 12 mg/dl、 β -D-グルカン 3.3 pg/ml(基準 10 以下)、抗好中球細胞質抗体 PR3-ANCA 10 EU/ml 未満(基準 10 未満)、MPO-ANCA 90 EU/ml(基準 20 未満)、IgE 2,180 IU/ml(基準 250 未満)。動脈血ガス分析(鼻カニューラ 3 l/分 酸素投与下)：pH 7.37、PaCO₂ 45 Torr、PaO₂ 65 Torr、HCO₃⁻ 25 mEq/l。胸部エックス線写真(別冊 No. 12A)と肺野条件の胸部単純 CT(別冊 No. 12B)とを別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 過敏性肺炎
- b Goodpasture 症候群
- c アレルギー性気管支肺アスペルギルス症
- d Wegener 肉芽腫症 (granulomatosis with polyangiitis)
- e アレルギー性肉芽腫性血管炎 (Churg-Strauss 症候群)

別冊 No. 12 A、B

45 27歳の女性。前胸部痛を主訴に来院した。3週間前から前胸部痛が出現し、次第に悪化したため受診した。喫煙歴はない。意識は清明。身長160 cm、体重52 kg。脈拍60/分、整。血圧108/70 mmHg。呼吸数16/分。SpO₂ 98 % (room air)。頸部リンパ節を触知しない。心音と呼吸音とに異常を認めない。血液所見：赤血球460万、Hb 11.9 g/dl、Ht 40 %、白血球7,300、血小板17万。胸部エックス線写真(別冊 No. 13A)と胸部造影CT(別冊 No. 13B)とを別に示す。

診断する上で必要性が低い検査項目はどれか。

- a 可溶性IL-2受容体
- b α -フェトプロテイン(AFP)
- c 絨毛性ゴナドトロピン(hCG)
- d 抗アセチルコリン受容体抗体
- e アンジオテンシン変換酵素(ACE)

別冊

No. 13 A、B

46 26 歳の男性。会社の定期健康診断を受診した。三尖弁閉鎖症で幼児期に Fontan 手術を受けているとのことである。胸部正中に手術痕を認める。手指の写真(別冊 No. 14)を別に示す。

予想される所見はどれか。

- a 徐脈
- b 低体温
- c 高身長
- d 高血圧
- e 高ヘモグロビン血症

別冊
No. 14

47 57歳の男性。動悸を主訴に来院した。半年前に早期胃癌の診断で幽門側胃切除術を受けた。術後、1回の食事量を少なくしてよくかんで食べるように心掛けていた。徐々に体調も良くなり、3か月前から食欲も増して食事量も多くなってきた。2か月前から時々、気分が悪くなり冷や汗が出て、胸がドキドキするようになった。症状は食後2～3時間で出現し、30～40分ほど持続して消失する。症状出現時に間食を摂ると症状は軽快する。運動時の胸痛や食後の胸やけはないが、心配になり受診した。既往歴は早期胃癌以外に特記すべきことはない。脈拍 72/分、整。血圧 138/72 mmHg。心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部は平坦、軟で、圧痛を認めない。

最も考えられるのはどれか。

- a 狭心症
- b 悪性貧血
- c 心房細動
- d 逆流性食道炎
- e ダンピング症候群

48 2か月の男児。右下腹部の膨らみを主訴に母親に連れられて来院した。全身状態は良好であり、機嫌もよい。膨らみを触れても痛がる様子はない。強く押すと消失するが離すとまた膨らむ。下腹部の写真(別冊 No. 15)を別に示す。

母親への説明として適切なのはどれか。

- a 「緊急手術が必要です」
- b 「膨れた時には浣腸してください」
- c 「いつもより哺乳量を減らしてください」
- d 「時々押して平らになることを確認してください」
- e 「できるだけ泣かさないように注意してください」

別 冊

No. 15

49 1か月の乳児。頻回の嘔吐と体重減少とを主訴に母親に連れられて来院した。在胎38週、2,750gにて出生。1週間前から、哺乳のたびに噴水様の嘔吐を認めるようになり、体重も減少してきたため受診した。皮膚のツルゴールが低下している。母親の妊娠中には特に問題はなかった。

この疾患について正しいのはどれか。

- a 女兒に多い。
- b 非胆汁性嘔吐である。
- c β 遮断薬が有効である。
- d 高カリウム血症を示す。
- e 呼吸性アルカローシスとなる。

50 68歳の男性。全身倦怠感を主訴に来院した。高血圧症で内服治療を受けているが、3か月前の健康診断では腎機能障害の指摘はなかった。血圧 138/80 mmHg。尿所見：蛋白(±)、蛋白定量 4.6 g/日、糖(-)、潜血(-)、沈渣に顆粒円柱とろう様円柱とを認める。血液所見：赤血球 304 万、Hb 10.8 g/dl、Ht 33 %、白血球 4,000、血小板 21 万。血液生化学所見：総蛋白 6.0 g/dl、アルブミン 3.8 g/dl、IgG 351 mg/dl(基準 960~1,960)、IgA 26 mg/dl(基準 110~410)、IgM 12 mg/dl(基準 65~350)、尿素窒素 55 mg/dl、クレアチニン 4.7 mg/dl、尿酸 8.8 mg/dl、血糖 96 mg/dl、HbA1c(NGSP) 6.4 % (基準 4.6~6.2)、総コレステロール 230 mg/dl。免疫血清学所見：CRP 0.2 mg/dl、CH₅₀ 38 U/ml(基準 30~40)。腹部超音波検査で両腎は軽度腫大している。腎生検の H-E 染色標本(別冊 No. 16)を別に示す。

考えられるのはどれか。

- a 悪性高血圧
- b 急性糸球体腎炎
- c 骨髄腫腎
- d 痛風腎
- e 糖尿病腎症

別 冊
No. 16

51 51歳の女性。突然の発汗とのぼせを主訴に来院した。肩こり、頭痛もみられるが、抑うつや不眠はない。49歳で閉経。身長157cm、体重57kg。脈拍72/分。血圧138/76mmHg。エストロゲンとプロゲステロンによるホルモン補充療法を開始することにした。

治療前の説明として適切なのはどれか。

- a 「血圧が上がります」
- b 「乳癌のリスクは下がります」
- c 「骨粗鬆症による骨折のリスクは上がります」
- d 「エストロゲンの貼付薬では効果がありません」
- e 「肩こりや頭痛より発汗とのぼせによく効きます」

52 26歳の男性。歩行困難を主訴に来院した。痙性歩行、上下肢腱反射亢進およびBabinski徴候陽性を認める。頭部単純MRIのT2強調水平断像(別冊No. 17A、B)、Aと同一断面の頭部造影MRIのT1強調水平断像(別冊No. 17C)及び頸椎単純MRIのT2強調矢状断像(別冊No. 17D)を別に示す。血清の抗アクアポリン4抗体は陰性である。

最も考えられるのはどれか。

- a 神経膠腫
- b 転移性腫瘍
- c 視神経脊髄炎
- d 多発性硬化症
- e 進行性多巣性白質脳症

別冊 No. 17 A、B、C、D

53 31歳の男性。左股関節部痛を主訴に来院した。半年前から誘因なく歩行時に左股関節部の痛みが出現した。安静時痛はない。25歳時から膠原病の診断にて副腎皮質ステロイドの内服治療を開始し、現在まで継続している。プレドニゾン内服量は最大で60 mg/日で、現在は10 mg/日であるという。身長170 cm、体重75 kg。体温36.3℃。脈拍64/分、整。左股関節の運動時痛を認める。左股関節の可動域は屈曲110°、伸展0°、外転20°、内転15°。来院時の股関節エックス線写真(別冊No. 18)を別に示す。

考えられるのはどれか。

- a 大腿骨近位部骨折
- b 大腿骨頭壊死症
- c Perthes 病
- d 骨嚢腫
- e 骨膿瘍

別 冊

No. 18

54 9か月の乳児。発熱を主訴に母親に連れられて来院した。生来健康で今回初めての発熱である。診察を待っているときに全身性左右対称の強直性間代性けいれんを認めた。3分後にけいれんは消失し意識も回復した。血液所見に異常は認めなかった。

母親への説明で適切なのはどれか。

- a 「遺伝性はありません」
- b 「すぐに脳波の検査をしましょう」
- c 「約半数に知能への影響がみられます」
- d 「将来、てんかんへ移行する可能性が高いです」
- e 「このけいれん発作は3人に1人の割合で再発する可能性があります」

55 32歳の女性。手指のしびれ感とつっぱり感とを主訴に来院した。症状は数年前からあったというが、本日、いつも以上に強くなったため受診した。バイタルサイン測定時の写真(別冊 No. 19A)と頭部単純CT(別冊 No. 19B)とを別に示す。

異常所見が予想されるのはどれか。

- a 血清 Ca
- b 血清 Cl
- c 血清 Na
- d 血 糖
- e 脳 波

別 冊 No. 19 A、B

56 1歳の男児。発熱、頸部の腫脹および前胸部の皮疹を主訴に母親に連れられて来院した。4日前から38℃台の発熱が続き、今朝から頸部の腫脹と前胸部の紅斑とに気付いた。体温39.3℃。脈拍148/分、整。両側眼球結膜に充血を認める。顔面下部の写真(別冊No. 20)を別に示す。右頸部に径3cmのリンパ節を1個触知する。心音と呼吸音とに異常を認めない。血液所見:赤血球406万、Hb 11.2 g/dl、Ht 35%、白血球19,600(桿状核好中球9%、分葉核好中球72%、好酸球2%、単球4%、リンパ球13%)、血小板39万。血液生化学所見:総蛋白6.2 g/dl、アルブミン3.1 g/dl、AST 40 IU/l、ALT 80 IU/l。CRP 7.9 mg/dl。

初期治療として適切なのはどれか。

- a 血漿交換
- b 抗菌薬の投与
- c 免疫抑制薬の投与
- d 生物学的製剤の投与
- e 免疫グロブリン製剤の投与

別冊
No. 20

57 68歳の男性。自宅近くの診療所にて胸部エックス線写真の異常を指摘され、詳しい検査を希望して来院した。2、3年前から持続する咳と労作時の息切れを自覚している。感冒をきっかけに自宅近くの診療所で胸部エックス線写真を撮影したところ、異常を指摘された。喫煙は20本/日を30年間。8年前に禁煙した。意識は清明。身長157cm、体重61kg。体温36.5℃。脈拍84/分、整。血圧124/72mmHg。呼吸数16/分。SpO₂97%(room air)。両側の背下部にfine cracklesを聴取する。血液所見：赤血球460万、Hb14.4g/dl、Ht45%、白血球7,600、血小板18万。CRP0.1mg/dl。動脈血ガス分析(room air)：pH7.35、PaCO₂47Torr、PaO₂86Torr、HCO₃⁻25mEq/l。呼吸機能検査所見：%VC69%、FEV₁%72%。胸部エックス線写真(別冊No.21A)と肺野条件の胸部単純CT(別冊No.21B)とを別に示す。

血液検査所見として考えられるのはどれか。

- a KL-6 高値
- b 好酸球増多
- c β-D-グルカン高値
- d 抗GM-CSF抗体陽性
- e アンジオテンシン変換酵素(ACE)高値

別 冊
No. 21 A、B

58 8歳の女兒。発熱、咽頭痛および皮疹を主訴に母親に連れられて来院した。2日前から38℃台の発熱と咽頭痛とが出現した。今朝から前胸部に癢痒を伴う皮疹が出現した。体温38.2℃。両側眼球結膜に充血はなく、軟口蓋は著明に発赤し、いちご舌を認める。顔面と前胸部とに丘疹性紅斑を認めるが口周囲にはない。

この疾患の主な感染経路はどれか。

- a 空 気
- b 経 口
- c 接 触
- d 飛 沫
- e 媒介動物

59 42歳の初産婦。妊娠38週5日に規則的子宮収縮を訴え来院し、陣痛発来と診断され入院となった。その後、鉗子分娩で3,200gの女兒を娩出した。頸管裂傷を認め縫合したが、非凝固性の出血が持続し、分娩後30分で出血量は1,500mlを超えている。顔面は蒼白で発汗を認める。意識レベルはJCS I-1。身長158cm、体重62kg。体温37.2℃。脈拍128/分、整。血圧78/48mmHg。子宮底は臍上3cmに触知し子宮収縮は不良であった。血液所見：赤血球330万、Hb 8.9g/dl、Ht 27%、白血球12,200、血小板9.2万、PT 30秒(基準10~14)、血漿フィブリノゲン50mg/dl(基準200~400)、血清FDP 135μg/ml(基準10以下)、Dダイマー 80μg/ml(基準1.0以下)。

治療に用いる製剤の組合せとして適切なのはどれか。

- a 血漿分画製剤と新鮮凍結血漿
- b 血漿分画製剤と濃厚血小板
- c 赤血球濃厚液と新鮮凍結血漿
- d 赤血球濃厚液と濃厚血小板
- e 濃厚血小板と新鮮凍結血漿

60 48歳の男性。不眠を主訴に来院した。長年にわたる支店での活躍が評価され、半年前に本店に栄転した。当初は喜んだものの、環境の変化になじめず、期待に応える仕事ができないと自分を責め、終日気分が晴れず夜は一睡もできなくなった。1か月前から仕事が手につかなくなり退職を申し出たところ上司に受診を勧められた。抑うつ気分、意欲低下および全般的な興味や関心の低下がみられ、身体診察で異常所見を認めないことからうつ病と診断した。

対応として適切なのはどれか。

- a 自殺については話題にしない。
- b 就寝前に少量の飲酒を勧める。
- c 病気の症状であることを説明する。
- d すぐに前の職場に戻すように上司に勧める。
- e 仕事ができない原因について上司と話し合ってもらおう。

61 65歳の男性。左内眼角部の結節を主訴に来院した。3年前から左内眼角部に小結節が出現し、徐々に増大した。初診時、左内眼角部に直径1 cm、高さ2 mmの結節がみられた。頸部リンパ節は触知しない。結節を辺縁から5 mm離して切除した。内眼角部の写真(別冊 No. 22 A)、ダーモスコピーの写真(別冊 No. 22 B)及び摘出組織のH-E染色標本(別冊 No. 22 C)を別に示す。病理学的に切除断端に病変は認められなかった。

切除後の対応として適切なのはどれか。

- a 温熱療法
- b 拡大切除
- c 経過観察
- d 電子線照射
- e 抗癌化学療法

別 冊

No. 22 A、B、C

62 17歳の男子。1か月前に左眼部に野球のボールが当たり、複視が消失しないため来院した。上方視をさせた時の写真(別冊 No. 23)を別に示す。

眼球運動障害の原因となっている筋はどれか。

- a 上直筋
- b 下直筋
- c 内直筋
- d 外直筋
- e 上眼瞼挙筋

別 冊

No. 23

63 74歳の女性。意識消失を主訴に来院した。8年前に心雑音を指摘されていたが生来健康であり、そのままにしていた。数か月前から労作時に2分程度の前胸部圧迫感を自覚していたという。昨日、自宅にて意識を失って倒れているところを家族に発見されたが、呼びかけにて意識は回復したため本日になって受診した。ADLは自立している。脈拍72/分、整。血圧144/68 mmHg。胸骨右縁第2肋間を最強点とする収縮期駆出性(収縮中期性)雑音を聴取し、心尖部にⅢ音とⅣ音とを聴取する。呼吸音に異常を認めない。下腿に浮腫を認めない。心電図で左室肥大所見を認める。胸部エックス線写真では、心胸郭比53%で、肺うっ血と胸水貯留とを認めない。心エコー検査で左室駆出率は43%。心エコー検査の断層像(別冊 No. 24 A、B)と連続波ドプラ法で記録した左室駆出血流速パターン(別冊 No. 24 C)とを別に示す。冠動脈造影で有意な狭窄病変を認めない。

対応として適切なのはどれか。

- a 経過観察
- b 強心薬投与
- c 大動脈弁置換術
- d 大動脈基部置換術
- e 心臓ペースメーカー植込み

別 冊

No. 24 A、B、C

64 69歳の女性。血便を主訴に来院した。3か月前から便に血液が付着していることに気付いていた。便器の水が血で染まる色が徐々に濃くなったため受診した。既往歴に特記すべきことはない。下部消化管内視鏡検査による回盲部から約20 cm 肛門側の写真(別冊 No. 25 A)と肛門から約30 cm 口側の写真(別冊 No. 25 B)とを別に示す。写真Aの病変に対しては内視鏡的粘膜切除が行われ、病理所見は腺腫であった。同時に行った写真Bの病変に対しては生検が行われ、病理所見は腺癌であった。胸腹部・骨盤部造影CTで肺や肝臓などの主要臓器に転移を認めない。

対応として適切なのはどれか。

- a 内視鏡的粘膜下層剥離術
- b 右半結腸切除術
- c S状結腸切除術
- d 低位前方切除術
- e 大腸全摘術

別 冊

No. 25 A、B

65 58歳の男性。腹部CTで異常を指摘され来院した。55歳時に自宅近くの医療機関で早期胃癌に対し幽門側胃切除術を受け、その後の定期検査の腹部CTで異常を指摘され、紹介されて受診した。自覚症状はない。体温36.2℃。脈拍88/分、整。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。血液所見：赤血球415万、Hb13.6g/dl、Ht42%、白血球5,800、血小板22万。血液生化学所見：総ビリルビン0.8mg/dl、AST24IU/l、ALT32IU/l、ALP246IU/l(基準115~359)、 γ -GTP44IU/l(基準8~50)、アミラーゼ155IU/l(基準37~160)、CEA2.2ng/ml(基準5以下)、CA19-932U/ml(基準37以下)。CRP0.1mg/dl。MRCP(別冊No.26)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 膵癌
- b 総胆管結石
- c 膵内分泌腫瘍
- d 自己免疫性膵炎
- e 膵管内乳頭粘液性腫瘍(IPMN)

別冊
No. 26

66 68歳の男性。白血球増多の精査を目的に来院した。3年前から白血球数の増加を指摘されていたがそのままにしていた。発熱、盗汗および体重減少はない。両側の頸部、腋窩および両側鼠径部に無痛性で弾性硬の径1cm未満のリンパ節を数個ずつ触れる。口蓋扁桃の腫大を認めない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。血液所見：赤血球479万、Hb14.0g/dl、Ht42%、白血球25,730(桿状核好中球3%、分葉核好中球16%、好酸球1%、単球2%、リンパ球78%)、血小板23万。血液生化学所見：総蛋白6.1g/dl、IgG814mg/dl(基準960~1,960)、IgA142mg/dl(基準110~410)、IgM125mg/dl(基準65~350)、総ビリルビン0.4mg/dl、AST14IU/l、ALT16IU/l、LD483IU/l(基準176~353)、尿素窒素16mg/dl、クレアチニン0.6mg/dl。CRP0.2mg/dl。CTによる全身検索では、径が1cm以上のリンパ節腫大を認めず、肝と脾の腫大を認めない。末梢血塗抹May-Giemsa染色標本(別冊No.27)を別に示す。骨髄穿刺検査では有核細胞数43.5万で、骨髄血塗抹May-Giemsa染色標本でも末梢血で増加しているのと同様の細胞が81%を占めている。末梢血細胞の表面マーカー検査では、CD5、CD20、CD23陽性の細胞が増加している。

対応として最も適切なのはどれか。

- a 経過観察
- b 放射線治療
- c 抗菌薬の予防投与
- d 同種造血幹細胞移植
- e 多剤併用抗癌化学療法

別冊
No. 27

67 58歳の男性。倦怠感と歩行時の息切れとを主訴に来院した。20年前に糖尿病を指摘されたが治療は受けていない。5年前から蛋白尿、2年前から高血圧を認めていた。母親が糖尿病である。意識は清明。身長170 cm、体重68 kg。脈拍96/分、整。血圧168/96 mmHg。眼瞼結膜は貧血様である。II/VIの収縮期心雑音を認める。両側の下胸部に coarse crackles を聴取する。下腿に浮腫を認める。尿所見：蛋白2+、糖(-)、沈渣に赤血球1～4/1視野。血液所見：赤血球270万、Hb 8.0 g/dl、Ht 25%、白血球7,200、血小板12万。血液生化学所見：総蛋白6.4 g/dl、アルブミン3.2 g/dl、フェリチン85 ng/ml(基準20～120)、尿素窒素58 mg/dl、クレアチニン5.1 mg/dl、尿酸9.5 mg/dl、空腹時血糖140 mg/dl、HbA1c(NGSP) 7.2%(基準4.6～6.2)、総コレステロール190 mg/dl、Na 140 mEq/l、K 5.5 mEq/l、Cl 111 mEq/l、Ca 8.0 mg/dl、P 5.5 mg/dl、Fe 80 μg/dl、総鉄結合能(TIBC) 300 μg/dl(基準290～390)。動脈血ガス分析(room air)：pH 7.34、PaCO₂ 35 Torr、PaO₂ 92 Torr、HCO₃⁻ 16.5 mEq/l。腹部超音波検査で両腎の大きさは正常である。

この患者に対する治療薬として**適切でない**のはどれか。

- a ループ利尿薬
- b カルシウム拮抗薬
- c スルホニル尿素薬
- d エリスロポエチン
- e 炭酸水素ナトリウム

68 52歳の男性。排尿困難を主訴に来院した。6か月前から夜間に尿意で目が覚めるようになった。1か月前から頻尿となり、2週間前から排尿の開始までに時間がかかることを自覚している。身長172 cm、体重68 kg。体温36.4℃。脈拍72/分、整。血圧134/82 mmHg。呼吸数12/分。腹部は平坦、軟。直腸指診で小鶏卵大で弾性硬の前立腺を触知し、圧痛を認めない。尿所見：蛋白(－)、糖(－)、沈渣に赤血球1～4/1視野、白血球1～4/1視野。血液生化学所見：PSA 2.8 ng/ml(基準4.0以下)。国際前立腺症状スコア18点(軽症0～7点、中等症8～19点、重症20～35点)。腹部超音波像(別冊 No. 28A、B)を別に示す。前立腺体積は46 ml、残尿量は80 mlであった。

まず行う対応として適切なのはどれか。

- a 経過観察
- b 自己導尿の指導
- c α_1 遮断薬の内服
- d 経尿道的前立腺切除術
- e 抗コリンエステラーゼ薬の内服

別 冊

No. 28 A、B

69 11歳の男児。2週後の修学旅行を前に夜尿が治らないため母親と来院した。既往歴に特記すべきことはない。両親と姉と妹の5人暮らし。尿所見：蛋白(－)、糖(－)、沈渣に赤血球0～1/1視野、白血球1～4/1視野。腹部超音波検査で両側の腎と膀胱とに異常を認めない。

対応として適切なのはどれか。

- a 経過観察
- b オムツの使用
- c 終日の水分制限
- d 修学旅行への不参加
- e 三環系抗うつ薬の内服

70 42歳の女性。「風邪がいつまでも治らない」と訴えて来院した。2週間前から微熱が出始め、その後38℃程度まで上昇、同じころから「のど」も痛くなり、寝るのもつらいほどだという。以前、風邪で処方された鎮痛薬を飲んでみたが改善しなかった。既往歴と生活歴とに特記すべきことはない。体温38.5℃。脈拍84/分、整。血圧122/80 mmHg。前頸部で気管の左外側に圧痛を認める。咽頭に発赤と腫脹とを認めない。心音と呼吸音とに異常を認めない。血液所見：赤血球420万、Hb 13.5 g/dl、Ht 39%、白血球8,000、血小板19万。血液生化学所見：TSH 0.02 μU/ml(基準0.2～4.0)、FT₄ 3.3 ng/dl(基準0.8～1.7)。免疫血清学所見：CRP 5.5 mg/dl、抗TSH受容体抗体陰性。頸部超音波検査で疼痛部に一致した低エコー域を認める。

治療薬として最も適切なのはどれか。

- a 抗菌薬
- b β遮断薬
- c 無機ヨード
- d 抗甲状腺薬
- e 副腎皮質ステロイド

71 42歳の女性。発熱と乏尿とを主訴に来院した。半年前から右示指と中指の中手指節関節、左示指の近位指節間関節および左環指の中手指節関節に腫脹と疼痛とを自覚していた。1か月前からは両側手関節にも腫脹と疼痛とを自覚した。2週前に受診し非ステロイド性抗炎症薬が処方され著効したが、3日前から発熱と乏尿とが出現した。意識は清明。体温 38.0 °C。脈拍 84/分、整。血圧 144/88 mmHg。呼吸数 18/分。2週前と比べ 5 kg の体重増加を認める。両側の下腿に浮腫を認める。尿所見：蛋白 1 +、糖(-)、潜血 1 +、沈渣に白血球円柱 1 ~ 4/1 視野。血液所見：赤血球 408 万、Hb 10.9 g/dl、Ht 32 %、白血球 12,300(桿状核好中球 6 %、分葉核好中球 63 %、好酸球 4 %、好塩基球 1 %、単球 6 %、リンパ球 20 %)、血小板 38 万。血液生化学所見：総蛋白 6.8 g/dl、アルブミン 3.0 g/dl、尿素窒素 86 mg/dl、クレアチニン 6.6 mg/dl、尿酸 10.2 mg/dl、Na 132 mEq/l、K 5.2 mEq/l、Cl 104 mEq/l。免疫血清学所見：CRP 10 mg/dl、リウマトイド因子(RF) 80 IU/ml(基準 20 未満)、抗 CCP 抗体 245 U/ml(基準 4.5 未満)。手の単純エックス線撮影で関節にびらんを認めた。入院後、非ステロイド性抗炎症薬を中止したところ解熱した。入院 6 日目にクレアチニンは 3.0 mg/dl に低下したが関節痛は悪化した。

現時点での治療薬として最も適切なのはどれか。

- a 抗菌薬
- b オピオイド
- c 副腎皮質ステロイド
- d 抗 TNF- α 抗体製剤
- e 非ステロイド性抗炎症薬(NSAIDs)

72 79歳の女性。両上肢の痛みとこわばりを主訴に来院した。2週間前から両上肢の痛みとこわばりが出現した。1週間前から頭痛と夕方から夜にかけての38℃の発熱とを自覚した。起床時にはこわばりがひどく、寝返りができない。2週間で体重が1.5kg減少した。体温37.9℃。脈拍84/分、整。血圧142/80mmHg。眼瞼結膜は貧血様である。両側の上腕に圧痛を認める。関節に腫脹と圧痛とを認めない。赤沈102mm/1時間。血液所見:赤血球301万、Hb9.6g/dl、Ht29%、白血球9,800、血小板47万。血液生化学所見:総蛋白5.9g/dl、AST29IU/l、ALT28IU/l、LD321IU/l(基準176~353)、CK38IU/l(基準30~140)、尿素窒素18mg/dl、クレアチニン0.7mg/dl、Na138mEq/l、K4.9mEq/l、Cl100mEq/l。

早急に対応すべき病態の判断に最も重要な質問はどれか。

- a 「よく眠れますか」
- b 「腰は痛いですか」
- c 「寝汗はかきますか」
- d 「目は見えにくくないですか」
- e 「太ももに痛みはありますか」

73 22歳の女性。外陰部の違和感を主訴に来院した。2か月前から気になっているという。痒みや痛みはない。陰唇と会陰部とに隆起性の病変が見られたため生検を行った。外陰部の写真(別冊 No. 29 A)と生検組織の H-E 染色標本(別冊 No. 29 B、C)とを別に示す。

治療として適切なのはどれか。

- a イミキモド塗布
- b アシクロビル経口投与
- c 副腎皮質ステロイド塗布
- d メトロニダゾール腔内投与
- e ヒトパピローマウイルス(HPV)ワクチン接種

別 冊

No. 29 A、B、C

74 48歳の女性。前頸部腫瘍を自覚し来院した。昨日、鏡を見ていて見つけ、触ってみてしこりがあることに初めて気づき、心配になって受診したという。その他の症状はない。身長 161 cm、体重 52 kg。脈拍 72/分、整。血圧 128/76 mmHg。頸部気管の右側に 3 cm 大の腫瘍があり、嚥下運動とともに上下する。腫瘍は弾性硬で気管に対して可動制限がある。右の側頸部に径 1.5 cm のリンパ節を 2 個触れる。

まず行うべき検査はどれか。

- a 放射性ヨード(^{123}I)シンチグラフィ
- b ガリウム(^{67}Ga)シンチグラフィ
- c 頸部超音波検査
- d 頸部 MRI
- e 頸部 CT

75 65歳の男性。総胆管結石の加療目的で入院中である。入院翌日に内視鏡的結石除去術を施行した。終了3時間後から持続性の心窩部痛と背部痛を訴えた。体温35.8℃。脈拍100/分、整。血圧84/56 mmHg。呼吸数20/分。SpO₂93%(room air)。顔面は蒼白である。腹部は平坦で、心窩部に圧痛と筋性防御とを認める。血液所見：赤血球422万、Hb 14.3 g/dl、Ht 43%、白血球10,100(桿状核好中球7%、分葉核好中球66%、単球3%、リンパ球24%)、血小板26万、PT 94%(基準80~120)。血液生化学所見：総ビリルビン1.2 mg/dl、AST 20 IU/l、ALT 19 IU/l、LD 151 IU/l(基準176~353)、ALP 246 IU/l(基準115~359)、γ-GTP 22 IU/l(基準8~50)、アミラーゼ1,495 IU/l(基準37~160)、クレアチニン1.0 mg/dl。CRP 0.1 mg/dl。腹部造影CT(別冊 No. 30)を別に示す。

次に行うべき治療として適切なのはどれか。

- a 血漿交換
- b 大量輸液
- c 緊急開腹手術
- d 胆道ドレナージ
- e 副腎皮質ステロイドのパルス療法

別 冊
No. 30

76 82歳の女性。全身倦怠感を主訴に来院した。5日前、就寝中に激しい左肩の痛みと冷汗とが出現した。体動や上肢の運動による症状の悪化はなく、2時間程度で改善したためそのまま入眠した。それ以降は同様の症状はなかったが、体がだるく1日中寝込んでいることが多くなり、心配になった家族に伴われて受診した。意識は清明。身長152 cm、体重58 kg。体温36.8℃。脈拍92/分、整。血圧100/72 mmHg。呼吸数18/分。SpO₂ 97% (room air)。頸静脈の怒張を認める。心尖部にⅢ音とⅣ音を聴取する。呼吸音に異常を認めない。肩関節に痛みと運動制限を認めない。血液所見：赤血球340万、Hb 10.4 g/dl、Ht 32%、白血球8,600、血小板13万。血液生化学所見：AST 38 IU/l、ALT 26 IU/l、LD 246 IU/l(基準176~353)、CK 138 IU/l(基準30~140)、尿素窒素18 mg/dl、クレアチニン1.0 mg/dl、尿酸6.9 mg/dl、血糖123 mg/dl、HbA1c(NGSP) 7.2% (基準4.6~6.2)、Na 136 mEq/l、K 4.4 mEq/l、Cl 98 mEq/l。CRP 0.8 mg/dl。胸部エックス線写真に異常を認めない。心電図(別冊 No. 31)を別に示す。

5日前からの病態を診断するために、次に行うべき検査はどれか。2つ選べ。

- a 心エコー
- b 胸部単純CT
- c 心筋トロポニンT
- d 骨シンチグラフィ
- e 左肩関節エックス線撮影

別冊

No. 31

77 12歳の男児。頭痛と嘔吐とを主訴に来院した。2か月前から起床時に頭痛があり、時に嘔吐を伴うという。意識は清明。頭部造影 MRI の T1 強調矢状断像(別冊 No. 32)を別に示す。

この疾患の特徴はどれか。2つ選べ。

- a 水頭症
- b 網膜血管腫
- c 両耳側半盲
- d 血清 CEA 高値
- e 放射線高感受性

別 冊
No. 32

78 28歳の女性。激しい頭痛を主訴に来院した。3日前から発熱とともに前頭部痛が生じ、次第に増強してきた。今朝はさらに高熱となり少しぼんやりしていた。意識レベルはJCSⅡ-10。体温40.2℃。脈拍140/分、整。血圧126/72 mmHg。項部硬直とKernig徴候とを認める。対光反射、眼球運動、四肢の運動および腱反射に異常なく、Babinski徴候も認めない。血液所見：赤血球380万、Hb 12.0 g/dl、Ht 38%、白血球16,000(桿状核好中球18%、分葉核好中球62%、単球4%、リンパ球16%)、血小板18万。CRP 26 mg/dl。頭部単純CTで異常を認めなかったため腰椎穿刺を行った。脳脊髄液所見：初圧240 mmH₂O(基準70~170)、外観は淡黄白色に混濁、細胞数5,600/mm³(基準0~2)(多形核球100%)、蛋白230 mg/dl(基準15~45)、糖8 mg/dl(基準50~75)。脳脊髄液のGram染色でGram陽性双球菌が見られた。

治療薬として適切なのはどれか。2つ選べ。

- a メロペネム
- b アシクロビル
- c カナマイシン
- d アムホテリシンB
- e 副腎皮質ステロイド

79 72歳の男性。咳嗽、喀痰および呼吸困難を主訴に来院した。8年前から労作時の呼吸困難を自覚している。2日前から咳嗽と喀痰が出現し、呼吸困難が増悪したため受診した。喫煙は40本/日を40年間。意識は清明。身長165 cm、体重57 kg。体温37.6℃。呼吸数28/分。SpO₂ 86% (room air)。頸静脈の怒張と胸郭の膨隆とを認める。両側の胸部にwheezesとcoarse cracklesとを聴取する。血液所見：赤血球456万、Hb 15.3 g/dl、Ht 44%、白血球10,400(桿状核好中球14%、分葉核好中球62%、好酸球3%、好塩基球1%、単球8%、リンパ球12%)、血小板16万。CRP 3.4 mg/dl。動脈血ガス分析(room air)：pH 7.29、PaCO₂ 65 Torr、PaO₂ 48 Torr、HCO₃⁻ 30 mEq/l。胸部エックス線写真(別冊 No. 33A)と胸部単純CT(別冊 No. 33B)とを別に示す。

治療として適切なのはどれか。2つ選べ。

- a 抗菌薬の投与
- b 気管支肺胞洗浄
- c 侵襲的人工換気
- d 胸腔ドレナージ
- e 気管支拡張薬の投与

別冊

No. 33 A、B

80 29歳の男性。咳嗽を主訴に来院した。1年前から左陰囊の無痛性腫大を自覚していたがそのままにしていた。3か月前から咳が出るようになり市販の鎮咳薬を内服しても軽快しないために受診した。意識は清明。身長176cm、体重74kg。体温36.8℃。脈拍88/分、整。血圧110/72mmHg。呼吸数20/分。SpO₂98%(room air)。心音と呼吸音とに異常を認めない。血液所見：赤血球462万、Hb14.0g/dl、Ht43%、白血球7,800、血小板35万。血液生化学所見：LD853IU/l(基準176~353)、hCG105mIU/ml。α-フェトプロテイン(AFP)974ng/ml(基準20以下)。陰囊部超音波検査で左精巣に長径8cmの内部不均一な充実性腫瘤像を認める。腹部造影CTで他臓器への転移を認めない。胸部エックス線写真(別冊No.34A)と肺野条件の胸部単純CT(別冊No.34B)とを別に示す。

行うべき対応はどれか。2つ選べ。

- a 精巣の針生検
- b 抗癌化学療法
- c 肺病変の針生検
- d 高位精巣摘出術
- e 抗菌薬の点滴静注

別 冊

No. 34 A、B

